

安平町

■発災後1年の歩み

■あの時—私たちは③（安平町関係者インタビュー）

安平町 発災後1年の歩み

〔平成30(2018)年〕

- 9月6日・3時7分、胆振地方中東部でマグニチュード6・7の地震が発生（震度6強）
- 道内全域（約295万戸）が停電
- 3時40分、安平町災害対策本部を設置。第3次非常配備避難所開設
- 東早来地区で災害負傷者2名を救急搬送
- 陸上自衛隊リエゾンオフィサー（LO）が到着。以降、国土交通省TECIFORCEをはじめ様々な関係機関等から応援派遣を受ける
- 町内全域で断水が発生
- 6時11分、地震発生（震度4 マグニチュード5・4）
- 6時45分、早来北進地区の一部に避難指示発令（1回目）。10月2日から縮小開始、翌年11月22日に完全解除
- 防災無線による避難呼びかけ一斉放送を実施
- 飲料水が到着。以降、全国各地から支援物資が届く
- 苫小牧保健所保健師による支援が始まる。以降、9月10日に北海道、青森県、船橋市、柏市の保健師およびDMAT、9月13日に北海道看護協会災害支援ナース、9月14日に茨城県、川口市の保健師による応援派遣を受ける

- はだしの広場を臨時ヘリポートとして開放
- 総合支所をはじめ追分地区の通電情報を確認
- 消防安平支署が厚真支援活動を開始
- 14時30分、災害救助法適用対策本部会議を開催（28日まで）
- 17時30分、気象庁が「平成30年北海道胆振東部地震」と命名
- 給水車等による給水支援が開始される（10月1日まで）
- 自衛隊等による給食支援が開始される
- 夜、総合庁舎周辺での通電情報を確認
- 避難所7カ所、避難者数516人
- 10時10分、早来北進地区の一部に避難指示発令（2回目）（10月2日に解除）
- 橋本聖子参議院議員が視察来町
- 14時00分、早来北進地区の一部（2回目）の避難指示区域拡大（翌年3月4日に解除）
- 15時00分、東早来地区の一部に避難勧告発令（9月13日に解除）、早来新栄地区の一部に避難勧告発令（9月13日に解除）、早来富岡地区の一部に避難勧告発令（9月13日に解除）、早来栄町地区の一部に避難勧告発令（9月13日に解除）、早来栄町地区の一部に避難勧告発令



はだしの広場臨時ヘリポート

令（9月8日に解除）、追分緑が丘の一部に避難勧告発令（9月20日から縮小開始、翌年3月4日に完全解除）

● 17時15分、早来大町地区の一部に避難指示発令（9月16日に解除）

● 18時42分、追分柏が丘地区の一部に避難指示発令（1回目）（12月17日縮小開始、翌々年2月13日に完全解除）

● 19時45分、追分柏が丘地区の一部に避難指示発令（2回目）（10月2日に解除）

● 20時00分、早来瑞穂地区の一部に避難指示発令（9月14日に解除）

● ごみステーションでのごみ収集が再開

● 避難所7カ所、避難者数718人

● 9月8日 ● はやきた子ども園が再開。
翌々日、おいわけ子ども園が再開

● 動画配信サービスによる町民メッセージを配信

● 安平町災害ボランティアセンターが設置される



避難所（早来町民センター）
〔北海道新聞社提供〕



三笠市による給水支援〔北海道新聞社提供〕

● 自衛隊の入浴支援が開始される（10月4日まで。10月5日、陸上自衛隊入浴支援部隊修了式が開催される）

● 総合支所の断水が復旧（翌日、総合庁舎の断水が復旧）

● 9月9日 ● 避難所7カ所、避難者数540人
● 9時40分、追分緑が丘の一部に避難指示発令（9月20日に解除）。11時54分、追分本町地区の一部に避難指示発令（9月26日に解除）。13時47分、追分花園地区の一部に避難指示発令（9月20日に解除）

● 安倍晋三首相が視察来町。被害状況などを及川町長、高橋はるみ知事らと話し合う

● 9月10日 ● 町営温浴施設ぬくもりの湯が再開

● 大師ヶ丘公園に臨時集積場を開設。災害ごみ自己搬入受入れを開始

● 21時00分、胆振東部地震による犠牲者が全道で41名（厚真町36名、札幌市1名、苫小牧市2名、むかわ町1名、新ひだか町1名）に（北海道発表）

● 9月11日 ● 16時00分、早来守田地区の一部、早来緑丘地区の一部に避難勧告発令（9月24日に解除）

● 9月12日 ● 100名を超えるボランティアが集まる。23日には最大となる約400名が集まる

● 9月13日 ● エリア放送で災害に関する



「あそびのひろば」での炊き出し

放送を開始

●「あそびのひろば」開催（9月28日まで）

●追分小学校、早来小学校、安平小学校、追分中学校の4校が再開。遠浅小学校、早来中学校（町民センターにて）は翌日14日より再開

9月14日 ● 住家被害認定調査を開始

● 断水の復旧率が50%を超える

9月15日 ● 「広報あびら」号外1号を発行

9月16日 ● 災害廃棄物（片付けごみ）排出処理が終了

9月18日 ● 追分高校が授業を再開

● 安平町内における停電が完全復旧する

9月19日 ● 被災者生活再建支援法適用

9月22日 ● 災害ごみ自宅前回収（9月24日まで）

9月23日 ● 仮設住宅住民説明会を開催

9月25日 ● 仮設住宅一期工事建設開始。早来地区12戸、追分地区8戸（10月29日完成。11月1日入居開始）

9月27日 ● 臨時集積場を開設。家電4品目受入れを開始する

9月28日 ● 「激甚災害」指定の閣議決定

9月29日 ● 安平町内における断水が完全復旧する

9月30日 ● り災証明書の交付を開始

10月1日 ● 遠浅公民館の利用再開

10月3日 ● 高橋はるみ知事が視察来町



「広報あびら」号外1号

10月5日 ● 第1次り災証明住家被害認定調査が終了

10月9日 ● 佐藤嘉大教育長が追分高校、町民センターを視察来町

10月10日 ● 復興・生活再建支援室を設置

10月11日 ● トレーラーハウスの内覧会が開催される

10月15日 ● 災害ごみ自宅前回収（10月18日まで）

● 自衛隊による災害支援活動が終了。修了式が開催される

10月16日 ● 早来公民館図書館の利用が再開される

10月17日 ● 山本順三防災担当大臣が視察来町

10月19日 ● 早来中学校仮設校舎建設が着工

10月20日 ● 仮設住宅抽選会の開催

10月21日 ● 胆振東部秋季少年野球大会が遠浅公園にて開催される

10月24日 ● 基礎支援金、加算支援金、応急修理の受付を開始

● 仮設住宅2期工事建設開始。トレーラーハウス3台（12月5日完成）25日、早来地区5戸、追分地区5戸（11月19日完成）

10月26日 ● 追分地区福祉仮設住宅建設開始（12月27日完成）

11月1日 ● 地域おこし企業人交流プログラム開始

11月2日 ● 株式会社ゼンリンと災害に関する協定を締結

11月5日 ● 被災者支援制度等に関する冊子を発行および配布

● 中学生を対象とした学習支援「あびら未来塾」を開始

● 震災後、初となる町政懇談会を開催

11月6日 ● 「安平町復興ボランティアセンター」設立

11月11日 ● 「日本を元気に 出張居酒屋えぐざいる in 安平町」が開催される

11月17日・「復興バザー」が開催される

11月22日・東京あびら会を設立

11月26日・衆議院議員団が視察来町

11月27日・追分地区の最後の避難所が閉鎖される

11月30日・早来地区最後の避難所が閉鎖される

12月3日・仮設住宅3期工事建設開始（トレーラーハウス4台）
（12月23日完成）

12月10日・義援金、一部損壊住家修理金の受付を開始

・自費解体、公費解体の受付を開始

12月22日・復興ボランティアセンターが「ハシゴ酒忘年会」を開催

12月27日・早来中学校仮設校舎の建設工事完了

〔平成31・令和元（2019）年〕

1月9日・学校法人リズム学園と災害時の協力に関する協定、復興活動の応援協力に関する協定を締結

1月15日・早来中学校仮設校舎で始業式が行われる

1月31日・一般社団法人日本自動車連

盟札幌支部と観光協定締結

2月21日・21時22分、地震発生（震度

5強 マグニチュード5・

8）

2月26日・高橋はるみ知事が早来中学

校仮設校舎を視察のため来



早来中学校3学期始業式

町

3月7日・早来地区仮設店舗舗完成・

鍵の引き渡し

3月12日・早来小学校で「8、000

人の笑顔プロジェクト」

の報告会が開催される

4月8日・「コミュニティ復興支援事

業」を新設し募集開始

4月9日・「あびら復興加速実行委員会」設立

4月19日・道の駅あびらD51ステーション開業

5月8日・鈴木直道知事が視察来町

5月16日・公費解体工事開始。翌年3月25日まで

5月17日・復興まちづくりに関する「町民意向調査」を開始

5月18日・「あびら復興感謝フェス」を開催

6月1日・東京2020オリンピック聖火リレー北海道ルートに
選出される

6月17日・復興まちづくり計画に係る町民まちづくり懇談会を開
催（町内4地区にて）。12月19日、安平町復興まちづ
くり計画が策定される

6月25日・早来郷土資料館が再開

7月10日・スポーツセンターの温水プールが利用再開

8月5日・復興まちづくり計画に係る町民まちづくり懇談会を開
催（町内4地区にて）

8月25日・ブラジル訪問・雪だるまプロジェクト

9月6日・復興祈念式典を開催



あびら復興感謝フェス〔北海道新聞社提供〕



山地被害 (春辺沢川)



道路被害 (北進焼却場線)
平成 30 (2018) 年 9 月 12 日撮影



橋梁被害 (瑞穂林道 2 号線)
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



山地被害 (トキサラマップ川)
平成 30 (2018) 年 9 月 11 日撮影



橋梁被害 (瑞穂林道 2 号線)
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



農地被害 (早来瑞穂地区)
平成 30 (2018) 年 9 月 11 日撮影



道路被害 (北進緑丘線)
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



道路被害 (追分安平線)
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



道路被害 (緑丘幌里線)
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



早来中学校校庭
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



道路被害 (若草団地東 1 条線)
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



店舗被害 (早来商店街)
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道新聞社提供]



店舗被害 (早来商店街)
平成 30 (2018) 年 9 月 28 日撮影 [北海道新聞社提供]



寺院被害
平成 30 (2018) 年 10 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



早来北進特定単身者住宅
平成 30 (2018) 年 11 月 2 日撮影



宅地被害 (早来北進地区)
令和元 (2019) 年 5 月 13 日撮影



避難指示区域
平成 30 (2018) 年 9 月 25 日撮影



ときわ球場
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



ときわ公園
平成 30 (2018) 年 9 月 11 日撮影



早来墓地
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



追分公民館図書室
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



早来斎場
平成 30 (2018) 年 9 月 22 日撮影



避難所炊き出し (早来町民センター)
平成 30 (2018) 年 9 月 8 日撮影 [北海道新聞社提供]



早来小学校給水所
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



自衛隊看護支援
平成 30 (2018) 年 9 月撮影 [陸上自衛隊第 7 師団提供]



自衛隊給水支援 [陸上自衛隊第 7 師団提供]



自衛隊給水支援
平成 30 (2018) 年 9 月 9 日撮影 [北海道新聞社提供]



自衛隊物資輸送支援
(陸上自衛隊第 7 師団提供)



自衛隊入浴支援



あびらチャンネル (緊急情報)
平成 30 (2018) 年 9 月 19 日撮影 [室蘭気象台提供]



災害対策本部



避難所 (追分公民館)
平成 30 (2018) 年 10 月 3 日撮影



避難所 (追分公民館)
平成 30 (2018) 年 9 月 12 日撮影



避難所 (早来小学校)



避難所 (追分公民館)
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



避難所
平成 30 (2018) 年 10 月 1 日撮影 [北海道新聞社提供]



避難所
平成 30 (2018) 年 10 月 20 日撮影



避難所
平成 30 (2018) 年 10 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



災害ボランティア受付
平成 30 (2018) 年 9 月 22 日撮影



ボランティア活動 (住宅修理支援)
平成 30 (2018) 年 10 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



ボランティア活動 (引っ越し作業)



災害ごみ
平成 30 (2018) 年 10 月 20 日撮影



住家被害認定調査
平成 30 (2018) 年 10 月 7 日撮影 (北海道新聞社提供)



住家被害認定調査
平成 30 (2018) 年 9 月 17 日撮影



水道漏水調査
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



住家被害認定調査
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



応急仮設住宅
平成 30 (2018) 年 11 月 14 日撮影 [北海道立総合研究機構提供]



福祉仮設住宅



早来中学校仮設校舎
平成 31 (2019) 年 4 月 28 日撮影



トレーラーハウス
平成 30 (2018) 年 11 月 8 日撮影



仮設住宅抽選会
平成 30 (2018) 年 10 月 20 日撮影



モバイルハウス
平成 30 (2018) 年 10 月 4 日撮影 [北海道新聞社提供]



仮設店舗 (早来地区)
平成 31 (2019) 年 4 月 17 日撮影



8,000人の笑顔プロジェクト
平成31(2019)年3月12日撮影



あそびのひろば
平成30(2018)年9月23日撮影



防災キャンプ(遠浅地区)
令和元(2019)年7月26日撮影



安平町復興ボランティアセンター
令和元(2019)年8月18日撮影



道の駅あびら D51 ステーション「開業記念式典」
平成 31 (2019) 年 4 月 23 日撮影



安平町復興祈念式典
令和元(2019)年9月6日撮影



道の駅あびら D51 ステーション
令和元(2019)年6月25日撮影

震災で得たつながりを 一つひとつ大切にしていきたい

安平町長 及川秀一郎



—— 発災当日の様子をお聞かせください。

9月6日3時7分、自宅の2階で寝ていましたが、尋常ではない揺れで飛び起きました。扉という扉が開いて、中の物がすべて飛び出てきた。「夢を見ているんじゃないか、現実であればただ事ではない」と思いました。たまたま作業服の入っているタンスの扉が開いていたので、すぐに着替

え、5分後くらいにはもう家を出たと記憶しています。幸い通勤経路は無事通行できたので、安平町役場には通常と変わらない時間で着いたと思います。私が着いた時には、すでに何人かの町職員が出てきていました。

当然のこととして、まず町民、町職員の安否確認。色々な名簿と突き合わせ、住民の方のご協力もいただきながら確認しました。初動としては、全体的な被災状況の把握に向けて動き始めました。

ここまで大きな災害の経験はなかったのですが、国や北海道への要請、自衛隊への派遣要請などの手続きを防災担当者と確認をしながら、早急に進めました。その後も次から次へと様々な案件が出てくる中で、一つひとつ判断しながら指示を出していきまし

た。

—— 非常事態の中でどのように情報を管理していったのですか？

震災直後から総務課に対策本部を置いて、そこに私、副町長、総務課長の3名が横並びとなり、1回で報告ができ、一元的に判断ができる形になりました。そのような体制が1カ月程度続いたと思います。

また、発災当日から朝と夕方^{*}の1日2回、各課課長のほか、気象台、自衛隊、警察、消防、開発局や北海道のリエゾンにも参加してもらい、その場で対策本部会議を開き、被害状況、復旧状況などについてそれぞれ情報提供してもらいました。

町民に向けては、1週間後から「あびらチャンネル」を使って対策本部会議の様

を翌日に録画放映しました。町民に対して発信できたのは大きかったと感じています。日頃から様子を見ていただいでいて、安心感が伝わっていたのではないのでしょうか。

——**発災後すぐに避難所が開設されています。**

すぐに、すべての避難所を開設しました。その後、徐々に自宅に戻る方も出てきたので、少しずつ避難所の統廃合を行いながら、同時並行で仮設住宅の建設に向けた準備も早急に進めました。

避難所には職員が張りついたので、早い段階で白老町から応援派遣をいただき、避難所運営を任せられたことが大きかったと思います。その分、職員が復旧に向けた業務に対応することができました。

——**防災訓練などの日頃の取り組みが活かされたのはどんなところでしょうか？**

公民館の活動として行ってきた、子どもたちを対象とした「防災キャンプ」という取り組みが避難所運営の中で非常に役立ちました。地域の方々にご協力いただき、1泊して避難所生活を疑似体験するものです。

が、これにより、避難時には何をすべきかわかっていましたから、子どもたちは気持ちの面でも安定していたと思います。

町内の自主防災組織の組織率は6割を超えましたが、災害に対してはふだんから地域と一体で動ける関係性をつくっておくことがやはり一番大切だと思います。人とのつながり、コミュニティが結果的には重要なのではないかと改めて強く感じました。

——**避難所の運営と並行して、り災証明書の発行が始まります。負担の大きな業務だったと聞いています。**

震災3日目くらいに札幌でり災証明に関する情報提供会があり、担当課長が参加しました。その場でお会いした新潟大学の田村先生と富山大学の井ノ口先生が翌日、安平町まで来て、中越地震で確立されたというシステムをご紹介くださり、その場で採用を即決しました。

り災証明書は家屋の被害を証明するもので、通常は被害を受けた方が証明書の発行を申請し、調査確認のうえ発行します。そのため、申請されたものだけを調査すればよいのですが、「調査に時間はかかるが、

復興支援が一番速く進むのは全戸調査だ」という先生方の助言に従って、町内全域の家屋を調査することにしました。

り災証明書の発行は震災から1カ月が勝負。復旧に関わる業務も集中し、人員が足りるだろうかと不安でしたが、先生方によれば「その時には応援部隊が来るんだ」ということでした。結果的に新潟県と岩手県から40名、道内からも20名の応援があり、総勢60名の体制で3週間ほどかけて全戸調査をしていただきました。初期の段階で、結果的に一番速く進むのはこの方法だご助言をいただいたのですが、やってみると本当にその通りで、全戸調査によって被災状況を一元的に管理することができました。

——**復旧に向けてボランティアの力が大きかったと聞きます。安平町では、福祉協議会とこども園を運営する学校法人が連携してボランティアセンターを立ち上げました。**

これも欠かすことのできないポイントで

※安平町が整備した地上デジタルテレビジョン放送のホワイトスペースを活用した町内限定の放送サービス。各家庭のテレビで、映像やデータ放送を活用したお知らせ情報等の放送を行っている。

す。震災の翌々日の早朝に、当時のはやきた子ども園の井内園長からボランティアセンター立ち上げに関する相談を受けました。すぐに社会福祉協議会などの関係者に連絡して、全員からOKをもらい、立ち上げに至ります。はやきた子ども園にも協力いただき、官民共同の体制で運営しました（詳細は112頁、114頁を参照）。

ボランティアの調整は相当なエネルギーを使うし、行政的にも大変なんです。そこを切り離して民間レベルで担ってくれました。我々行政としては、道路などのインフラ、公共施設、住民の暮らしに集中できたのも大きかったと思います。

そのような方々が残って、その後の「復興ボランティアセンター」につながる流れが出来たんです。その時々に必要な取り組みを主体的に考えてやっていただけたと思っています。

—— 発災後の応急対応が一段落すると、**仮設住宅の建設に焦点は移ります。**

仮設住宅はニーズを把握したり、調査を行ったりしながら戸数を決めるんですが、民間のアパートをみなしの仮設住宅にする

仕組みも組み合わせながら進めていきました。

また、被災した農家の方が離れた仮設住宅から通いながら、農作業をしたり家畜の世話をしたりすることは難しいですから、農家の敷地内に仮設住宅としてトレーラーハウスの設置を認めていただきたいとお願いしました。これは3町で要望しました。生活再建に役立つことだと訴え、それも北海道も受け入れてくれたのが大きかったと感じています。

福祉仮設住宅もそうですが、被災者に寄り添う形で、こうした仮設住宅を建設、設置していただいたのは全国初ではないかと思えますので、先例をつくることができましたと感じています。

—— 12月には**早来中学校の仮設校舎が建てられました。**また、**計画中の新校舎は小中一体型になると聞きました。**

早来中学校の仮設校舎建設にはもっと時間がかかると思っていました。スピーデイに対応いただき、年内には完成しました。それまでは町民センターを学校の代わりに使っていたんです。



(仮称)「安平町立早来小学校・中学校」実施設計 俯瞰イメージ

平成28(2016)年に小中一貫の義務教育学校という国の制度が出来て、追分地区では施設分離方式ですが、小中一貫教育を導入していました。中学校を建て直すのであれば、早来小学校の校舎も老朽化していますから、より良い学びの場を創ろうと、小学校と一体型の学校整備による早来

中学校の再建を目指すことになりました。

また、ただ再建するだけでなく、自然環境や情報教育にも配慮し、地域の人にも使っていただけるような学校を目指して進めています。教育の質を高めて、移住定住につなげていきたいということが、安平町の基本的な柱の一つでもありましたから。

現在、実施設計を行っていて、令和3（2021）年度、令和4（2022）年度の2年間で整備をする予定で順調に進んでいると思います。学校建設を一番大きな課題として取り組んでいる最中です。

——復興まちづくり計画について伺います。

ちょうど町の総合計画の策定が行われていた時に震災が起きたので、まちづくりのベースとなるものを一体的に検討し、令和元（2019）年12月に復興まちづくり計画と第2次安平町総合計画の中期基本計画を同時に策定しました。現在は復興まちづくり計画の取り組みも着実に進められています。

震災前は、旧町時代の「追分」「早来」という感覚の方がまだ多く、一体感の醸成というところが大きな課題になっていま



復興まちづくり計画策定に向けた町民まちづくり懇談会

すが、今回の震災によって町民の気持ちが一つになって、同じ方向に向かって協力していこうという機運が生まれたと感じています。

安平、遠浅も含めて4つの特色を持つ地域があるので、その地域にとって何が必要なのかを考えながら計画を立てました。復興まちづくり計画を成し遂げることで、町民に安心を届けていきたいと思っています。

——最後に、震災を振り返って伝えたいメッセージなどをお願いします。

町職員はこの約2年で様々な経験をして、色々な意味でスキルアップしました。それは個人にとっても、安平町にとっても財産になりました。町民はもちろん、全国から様々な応援をいただき、これから返しをしていく必要があります。

また、厚真町、むかわ町と3町で一緒に乗り越え、様々な経験をして、多くのことを教えていただきました。胆振東部としてさらに連携していくことが期待できますし、他の町との連携にも力を入れていきたいと考えています。

平成31（2019）年4月には、「道の駅あびらD51ステーション」もオープンしました。元気になった様子を発信する復興のエンジン役になればと思います。

このように、震災によって得たものもたくさんあります。人脈であったり、団体とのつながりであったり、そういったところをこれから一つひとつ丁寧につないでいければいいと思っています。

町が覚悟を持って選択した「全棟全戸調査」 効率的な生活再建支援を実現

——最初に、お二人のご関係と研究についてお教えください。

井ノ口 私も田村先生も、京都大学防災研究所の林春男先生（現 国立研究開発法



井ノ口 宗成さん

人防災科学技術研究所理事）の門下生です。私は今、富山大学にいますが、元々は田村先生と同じ新潟大学で研究をしていました。

我々の生活再建支援研究が始まったのは、平成16（2004）年の新潟中越地震からです。災害が起こると被災地に行き、現場の状況をモニタリングしながら、過去の事例、現状の課題をふまえて、次に起こることを想定し、得た知識を現場の方々に還元しつつ、課題について一緒に考え、必

要に応じて支援するスタイルを採っています。

中心に置いている課題は「生活再建」で、住家被害認定調査を行い、り災証明書を発行。色々な支援金を配り、それでも支援が足りない人に様々な施策を考えていくというものです。

——安平町にはどのような経緯で関わることになったのでしょうか？

井ノ口 地震発生当初、被害状況などについて、北海道庁で情報を収集することになりました。北海道庁では対口支援団体である新潟県がすでに動いていました。新潟県と市町村は協定により、被災自治体応援のため「チームにいがた」を組織し、研究者は首都圏レジリエンスプロジェクト（防災科



チームにいがたと安平町メンバー

新潟大学教授
富山大学准教授

田村 圭子さん
井ノ口 宗成さん



安平町長と打ち合わせをする防災科研と富山大の支援者の皆さん

研)生活再建分科会として、協働しました。そして、内閣府が住家被害認定調査の説明会を北海道庁で開催し、出席することになりました。そこで、北海道が被災自治体の出席者に対し「生活再建支援に関わる研究者が来ているから、わからないこと、助

けてほしいことがあったら、相談されてはどうか？」と声をかけた。そこで、手を挙げられたのが安平町だったんです。

—— **それですぐに、災害対応に関わることに決まったのでしょうか？**

井ノ口 いえ、最初に我々のやり方をご納得いただかなければなりません。安平町の担当者の方には「全棟全戸調査という一見すると非効率に見える方法を採用しているが、それでもいいですか」とお話ししました。そして、町長ならびに部局の意思決定者ときちんと打ち合わせができる場と時間が必要であることも付け加えました。すると、すぐ翌日に「町長を含めて場を開くので来てください」と呼ばれたんですね。安平町の覚悟と我々の助けたいという思いがそこで結ばれました。

—— **安平町に入った時の印象は？**

田村 安平町には9月10日に入りました。具体的な被害状況はわからないまま



田村 圭子さん

ですね。報道は、厚真町の土砂災害がメイ

ン、それ以外の詳細はわからない。ただ、震度分布情報から想像するに、建物被害は出ているだろうと。そうした状況で現地に入りました。

まず、これまで経験した被災地にはない北海道独特の広さや距離感に驚きました。そして被害は、家屋や学校などを含め、思った以上に大きいという印象。ただ、北海道の家屋は本州のそれと違ってなじみがないものだったので、実際にどういった被害が出ているかは想像しにくかったですね。あと、牧場の被害が甚大だということは世間にはまったく知られていなかったもので、びっくりしました。

—— **「全棟全戸調査」を取られている理由をお聞かせください。**

田村 この町に行っても、基本的には震度の高いエリアの「全棟全戸調査」をおすすめしています。

その理由の一つ目は、被害が出ている・出ていないを調査時点で見極めるのはすごく難しいということです。二つ目は、応援の方が来ている間にできるだけ被災状況をつかんでおくことが、最終的には市町村職

員の業務の効率化につながるということ。住民の皆さんも最初は「どうして全部回るの。時間がかかるなあ」と思われるんですが、最後は「自分の家に来てくれてよかった」となる。り災証明書発行までは時間がかかるけれど、支援を行う時も、該当者は100パーセントわかるので、結果的には、スムーズな支援を行うことができる。安平町はそれほど大きな町ではないので、応援があるうちに調査を行うことができました。どの段階の効率を優先するかですね。

——安平町で導入した「システム」について教えてくださいいただけますか？

井ノ口 個人もしくは世帯の被災者が、災害によりどのように被災し、どのような支援を受けていて、どのような状態になっているかを自治体が包括的に管理することができるシステムです。

そこから、例えば1,000人が同じような困り事を抱えているとわかれば、自治体は支援制度を考えなければならぬ。あるいは2〜3人が困っているんだったら、個別の対応が必要になる。困り事は千差万別ですが、そもそもどのくらいの被災者が

どのような状態にあるのか把握しておかないと、手の差し伸べ方がわからない。被災者の生活再建支援を行うため、必要な情報を包括的に管理しましょうというシステムです。

——素晴らしいシステムですね。

井ノ口 活用する支援制度の決定には被害の確定が必要で、誰がどこでどう被災したかという情報が不可欠です。「誰が」は住民基本台帳、「どこで」は建物の課税台帳。ただし、「どう被災したか」は災害が起こった後でしかわからない。そこで必要なのが住家被害認定調査です。全棟全戸調査で得た被害認定調査データを管理。そして、り災証明書の発行を迅速に行い、被災者の状態を包括的に管理できるシステムが安平町にご提案させていただいたものです。田村 「システム」というのは、コンピュータシステムだけを指すのではなく、考え方全般を指します。全棟全戸の調査を行う、調査の効率化のためにタブレットを使う、調査内容の入力をきちんと行えたか大きな画面で確認する、り災証明書を発行する時にできるだけだけお待たせしないよ

うにする、丁寧にお話を聞く、自治体職員の研究を行うなど、マネジメントも含めて私たちは「システム」と呼んでいます。

——調査で苦労されたこと、印象に残っていることは何でしょうか？

田村 過去の被災地での、付属屋に居住実態があった、車庫のり災証明書を求める被災者が多かったなどの経験をふまえ、車庫や付属屋まで幅広く調査をお願いしたので、担当者は大変だったと思います。研究者が「これがいい」と思ったことを、少し非効率でも「被災者のため」「被災自治体のため」という思いでやっていたのが、すごく大きかったですね。

井ノ口 全棟全戸調査というのは、結局は見落とさないようにすることです。北海道の住宅には屋根瓦がなく、建物の構造が道外と違い、被害の出方も違いますし、応援に来られた方も道外の方ですから「壁の四隅のずれや、窓枠の隅のゆがみなどは丁寧に見てください」とお願いした記憶があります。

現場で見て集めた情報をすぐに調査の皆さんにフィードバックするというのが、少

し大変でした。

田村 あとは、やっぱり範囲が広いということ、調査の棟数が読めなかったことですね。牧場に1班派遣したら「30棟ありました」と言って終日帰ってこなかったとか。牧場の中に、あれだけ建屋があるということも当初は予測できませんでした。従業員の方たちの宿舎とか、そういう方たちを見落とさずに支援できたのは、すごく大きいと思います。

——安平町の取り組みで「これはいい」と思われたことはありますか？

田村 1年後の復興祈念式典でうかがった時、発災の日に防災訓練を総務課長が中心となって行っていたのはよいことだと思いましたね。

井ノ口 素晴らしいなと思ったのは、エリア放送の「あびらチャンネル」*です。あれは、すごく大事です。他の自治体から災害のことで何か聞かれたら、自信を持って話されたらいいと思うくらい、あれは良い取り組みだと思います。

田村 SNSなどではなくて、ちゃんと町長自身が顔を出して説明するという。ネット

ト環境のない高齢の方も皆さん見られるし、テレビを活用した情報発信は素晴らしいなと、私も思いました。

——最後に、安平町のこれらについて何かコメントをいただけますか。

田村 安平町の皆さんに接した中で強く感じたのは、行政も町民の方たちも、町を盛り上げていくお気持ちがとても強いということ。私たちが専門家の助言を謙虚に受け入れて、復興にもすごく熱心に取り組んでおられます。復興まちづくり計画は、いずれは町の総合計画と結合して町の発展に活かされるのだと思いますが、すごく大きな視点の中で進められているというのが非常に印象的でした。できたら、そういった姿勢をこれからも続けていただきたいと思います。

井ノ口 安平町は災害を受けて傷ついているにもかかわらず非常に前向きで、観光施設や学校教育などチャレンジングなことを色々色々させている。強いし熱いし、何かカッコいいなと思います。

あとは、田村先生も言われた復興まちづくり計画を、町民の皆さんの「安平町はどうあるべきか、どうしていきたいのか」という声をちゃんと聞いたうえで、無理のない、そして前に進んでいく形で立てられたのがすごくいいですね。計画が実現すると、皆さんの自信にもつながるんじゃないでしょうか。ぜひ実現して「よかったねえ」とみんなが笑える日が来たらいいなと思います。

※安平町が整備した地上デジタルテレビジョン放送のホワイトスペースを活用した町内限定の放送サービス。各家庭のテレビで、映像やデータ放送を活用したお知らせ情報等の放送を行っている。



チームにいがたと研究者(上:安平町 下:北海道庁)

地域のニーズに耳を傾け、手助けする 寄り添うことを大切に

安平町社会福祉協議会事務局長 小川誠一さん
安平町社会福祉協議会事務局長補佐 高橋光暢さん

——発災当日の状況を教えてください。

小川 当時の社会福祉協議会は、早来の本所に4名配置、自分の支所に2名配置。



小川 誠一さん

発災当日、暗いうちに早来の本所に駆けつけたのは高橋で、すぐに状況確認をしています。私は追分に住んでいるので、自分の支所にまず駆けつけました。

高橋 本所の中は、キャビネットなどが全部倒れた状態でした。停電により照明



高橋 光暢さん

も点かない状況。靴を履いたまま入り、カメラを持って事務所を出ました。社会福祉協議会では訪問介護の事業も行っているの

の方などのご自宅を確認するため、見回りに向かいました。大規模な災害という

テレビの映像で見た阪神・淡路大震災のイメージがあり、建物の倒壊が想定されましたが、そのような家屋はなく、外観からわかる被害は見受けられません

小川 追分の支所はあまりひどい状態ではなく、意外と大丈夫だったという印象でした。ただ、後日談になりますが、建物の裏に地割れが発生していたり、床と壁の間が30センチも開いているなど、見回りでは気づかなかった大きな被害があることが判明しました。

——災害ボランティアセンター開設までの経過について教えてくださいませんか？

小川 9月8日の昼過ぎに立ち上げた

憶しています。発災当日から、災害ボランティアセンター立ち上げについては、関係

機関を交えて考えていたんですが、安平町の被害状況がはつきりとわかりませんでした。ただ、徐々に判明してきた中で外観をただけではわからない被害があり、例えば「室内散乱による片付けが必要」といった様々な声が聞こえるようになってきました。

高橋 そこで、地元で「はやきた子ども園」を運営する「学校法人リズム学園」と一緒に立ち上げるようになりました。

小川 リズム学園では、SNSを活用したボランティア募集をすでに行っていて、ある程度の人数が集まっているということでした。平時からICTの活用^たに長けていらしたんです。リズム学園にはボランティア

の募集と管理をお願いし、地元の状況を把握している私たち社会福祉協議会が住民ニーズ調査を引き受けるなど、役割分担を明確にした体制づくりができました。

——具体的にはどう動かれましたか？

高橋 地域の民生委員さん30名にもお願いしてボランティアの依頼票を配布すると同時に、心配な方には直接訪問して困り事の拾い上げを行っていただきました。当初は高齢者で心配な方を中心に回っていましたが、「助けてほしい」と口に出せない方が結構いるのではないかとという話が出て、9月14日からの3連休に全戸訪問を始めました。全戸訪問は9月中にさらに1回と、計2回行っています。大変だったこと、困ったこと、びっくりしたこと、自分の思ったことを相手に伝える。それで少しでも相手の気持ちが楽になればと考えました。

——どのようなニーズがありましたか？

小川 個人の場合は、まず自宅の片付けがあって、その後は片付けの結果発生した災害ごみの整理。そのほか、水を届けてほしい、お風呂に連れて行ってほしいという要

望もありました。さらに自宅に住めなくなった方は仮設住宅などへの引っ越しも必要になります。その手助けですね。依頼は翌年のゴールデンウィークくらいまでであったと記憶しています。

また、避難所が開設されていた頃は、町からの様々な情報を掲示板に掲示し、情報を得る仕組みをつくりました。

高橋 ニーズ調査の結果は紙でまとめてい



家屋内の片付けを行ったあと、家財道具をトラックで運ぶ

ました。それだけでは現況がわからないので必ず現地調査に入り、必要な人数や機材を見極めます。中に入っても危険がないか、建物の危険度は専門職でないと判断できませんから、時には建築士のボランティアさんにも同行いただきました。

——今後に備えて行っていることは？

高橋 ボランティアや運営のお手伝いをしてくださるスタッフは、様々な場所から訪れます。ですから、初めて安平町に来た方でもすぐに作業にかかることができるように、作業手順を示したマニュアルの整備を行っています。名簿と地図をセットで整理しておくことも必要です。日常の業務でも活用できますし、災害時にローラーで回る時にもそれがあれば、少ないタイムロスで動けますので。日頃から困ることがある方は災害時にはより困った状況に置かれるので、情報をきちんと整理しておくことがとても大事だと、これまで以上に感じています。

違う立場だからこそ見えるもの ボランティアセンターを支えたもう一つの力

——リズム学園ではICTを活用されているとお聞きしました。

井内 平成28（2016）年度に全国に先駆け、公私連携の認定こども園として「はやきた子ども園」の運営を始めた時から、デジタルを駆使して働き方改革に努めています。具体的には1人1台のPCとスマートフォン端末の使用、登園管理システムの導入、電子黒板の活用などです。先生同士の連絡・コミュニケーションもトランシーバとイヤホンマイクを使ったり、チャットツールを取り入れたりなど、色々な形で工夫しています。

——ボランティアセンターではどこから着手されましたか？

井内 災害ボランティアセンターを立ち上げた直後は、本部の設置より先に情報発信

に着手しました。ボランティア志願者の方は、「状況を知りたい」「情報がほしい」だろうと。ホームページとフェイスブックページ、ツイッターを一晩で開設しました。ただこの時、電話番号だけは掲載していません。電話番号を載せると、電話対応に時間と労力が取られてしまいます。発災時は対応する時間も人手もないので。それよりも園で使っている参観日の申し込みや登降園の登録、メール連絡システムなどを災害ボラセン用にアレンジしてWEBの仕事組みを使い、管理業務を徹底的に簡素化することに取り組みました。

WEBを使ったボランティア募集では、現地に来てから仕事の割り振りをするのではなく、申し込み時点で「〇〇ができる人、△人募集」という感じでニーズと定員を明示し、事前に何をするのかわかるよう



左から溝口さん、井内さん、林さん、台さん

学校法人リズム学園
東京都出身
埼玉県出身
山梨県出身

井内聖さん
林賢司さん
台正人さん
溝口駿さん



安平町災害ボランティアセンター本部の様子

に努めました。心がけたのは「とにかく人を集めること」「とにかく支援作業を見つけること」。道外から来ていた方もすべ

でも道路に出されている災害ごみを3日間ですべて回収する「クリーンプロジェクト」では、大人のボランティアの方たちだけではなく、苦小牧の野球部や札幌のサッカー部といった高校生のほか、地元の少年団も保護者の方と一緒に「自分たちの町をきれいにするのなら、私たちも手伝います」と言って参加してくれました。どれも、多くのボランティアの方の力があって取り組めたことです。

あったら次は行けるようにしたいと思っていました。最初の仕事は安平公民館のトイレ掃除で、その後は資材の整理作業です。溝口 私は山梨県から来たんですが、当初道外からのボランティアを受け入れていたのが安平町だけだったので、必然的に来たという感じでした。最初の仕事は台君と同じで、安平公民館のトイレ掃除を午前中やって、午後には5名のチームで民家の片付けをしました。

て受け入れ、支援のニーズ調査を徹底しました。人手があれば早く支援の手が届きます。善意で来てくださった方々を何もしてもらわずに帰さない、ということにも気をつけていました。そのほか、受付はタブレット端末に任せたり、必要な情報掲示には子ども園にあった電子黒板を利用したりと、ICTを活用して管理業務を減らし、現場に人を多く配置するようにしました。

——そのほかに取り組まれたことは？

井内 避難所の移転、仮校舎への引っ越し、掲示板の設置と更新、広報（号外版）の印刷と全戸配布、ニーズ調査の全戸訪問など、できることはすべてやりました。中

——林さん、台さん、溝口さんはボランティアでどんな仕事をされましたか？

林 僕はまちづくりの会社を運営しています。震災の前から安平町はご縁のある町でした。ニュースで知って「とにかく何かしたい」と思い、9月15日に井内さんを頼って災害ボランティアとして来ました。2日ほど滞在して、ICTを誰でも使えるようにするための運用マニュアルを整備する仕事を行いました。

台 僕は埼玉県出身ですが、中学校の卒業式が東日本大震災の日だったんです。その時に動きたいと思いながら動けなかったという気持ちはずっとあって、大きな災害が

——振り返ってみていかがですか？

井内 安平町と社会福祉協議会が民間である私たちの関わりを認めてくれたのが大きかったです。そして、私たちもNPOや民間の持つネットワークやフットワークの軽さを活用すると大きな力になることを実感しました。ICTの活用にも共通するのですが、「受け入れる」ことが大切だと思います。すべて自分たちでやるのではなく、立場の違う人や新しい技術、今まで使っているものの応用や助けに来てくれる人など、「受け入れる」ことが次につながるようになると思います。

復興の光をともし新しい場所 震災前よりももっともっと魅力的なまちに

——復興ボランティアセンター立ち上げの

経緯を教えてください。

林 僕は、安平町の「地域おこし企業人」としてコミュニティづくりをテーマとした業務を震災前から行っていました。話は一度震災でストップし、僕も災害ボランティアセンターで活動していましたが、再び動き出し、平成30（2018）年11月1日に地域おこし企業人として着任しました。復興ボランティアセンターの立ち上げは、着任の2週間くらい前に災害ボランティアセンターの今後について、井内さんと話したことが始まりでした。

井内 その頃はまだ商店も閉まっていて、顔見知りのお店の方々はみんな疲れきって



林 賢司さん

いました。このままでは商売をしている人は本当に大変だと感じたんです。週末



井内 聖さん

以外はボランティアも日に日に減っている状況でしたが、安平町役場の人たちはやらなければならぬことがまだまだたくさんあって、倒れるんじゃないかと思うほど精いっぱい働いている。商店街は自力で立ち直れそうにない。だとしたら、残ってこれているボランティアの力も借りながら、町を元気にするために何かしよう——それが復興ボランティアセンターです。ただ、その活動は災害ボランティアセンターとは異なるものになりますから、一般社団法人の認可を受けて11月6日に立ち上げました。

——今お話をうかがっている、この「EN TRANCE」というスペースが活動の拠点ですね。

林 災害ボランティアセンターは、復旧活動を通じて「マイナスをゼロにする活動」を行います。復興ボランティアセンターは「ゼロからプラスを生んでいく活動」を行っています。ただ、「地域を盛り上げよう！」と言っても、町民の気持ちや前向きになっていなければ何も変わりませんよね。本当に地域を盛り上げるには「空気・雰囲気」が必要で、そういう前向きなエネルギーが蓄積する「場」が必要だと思うのです。いろんな思いを持った町民が集まり、様々なことを語ったり、未来を考えたりする過程で、そうした空気・雰囲気は少しずつつくられていくのだと思います。



復興ボランティアセンターの活動拠点 [ENTRANCE]

「そうした空気がつくられる場を生み出そう」ということで誕生したのが追分地区にあるこのコミュニティスペースで、「復興した未来への入口」という意味を込めて「ENTRANCE（エントランス）」という名前にしました。

——クラウドファンディングも活用されたと聞きました。

林 この「ENTRANCE」のオープンにあたって活用しました。復興ボランティアセンターとは別の話になりますが、安平町ではクラウドファンディングの活用を推進する事業が行われています。これは「安平にチャレンジの文化をつくろう」という狙いからで、その先駆けとしてENTRANCEの改修費用とストーブの購入費用の一部をクラウドファンディングで集めました。ENTRANCEでのチャレンジが背中を押すように、その後は、クラウドファンディングに挑戦して成功したグループがいくつも出ています。一つは少年野球のチームが、液状化で使えなくなったグラウンドの代わりに室内球場をつくりたいという目的で挑戦して成功し、今では自分たちの練習場で練習ができています。ほかにも、障がいのある方の居場所となるコミュニティサロンをつくりたいとNPOが挑戦されて、成功されています。

——センターの立ち上げと同じ時期に、中学3年生対象の「あびら未来塾」が始まっていますね。

井内 余震や家庭の事情で「千歳や苦小牧の塾まで子どもを通わせられない」というお母さんの声が聞こえてきたのが始まりでした。僕も元は中学校の教師でしたので、3年生の受験は気になっていました。そんな状況から「塾をやろう」という話になったんですが、教えられる人がいない。そこで、「教えないけれど、みんながここに集まって勉強ができます」という塾をつくったんです。それと同時に、教えてくれる人、生徒の相談に乗ってくれる人をボランティアで募集しました。すると、塾の先生や現場の先生、苦小牧や旭川など色々な所から人が来てくれました。飛行機に乗って、毎週のように横浜から来てくれた方もいました。

災害ボランティアセンターも同じですが、子どもたちや住民など当事者の悩める声を「困っている方がいるので助けてくれませんか」と代弁して伝えることが、ボランティアセンターの役割だと改めて感じました。あびら未来塾は、今は形を変えて、

安平町の公営塾「教えない放課後教室あびらば」として運営を続けています。

——復興ボランティアセンターでは、どのような取り組みを行っていますか？

井内 一つは「ハシゴ酒」というイベント的な取り組みです。

台 そのそもその始まりは、商店街の方から「震災以降、町に人が出歩いていない」という言葉を聞いたことでした。ちょうど平成30（2018）年の年末、「自粛ムードで町に人が歩いていない」という声も出てくることから「ハシゴ酒忘年会」と題したイベントで「町民と商店街を巻き込んで、町に元気を取り戻そう！」という話になり、まずは追分地区でイベントを企画しました。驚くことに、初回から80人以上が集まったんです。イベント当日はスタート地点に集合して、みんなで乾杯。そこからはばらばらになって、追分地区の飲食店やスナックなど10店舗を巡りました。

イベント終了後に「早来でもやりたーい！」という声が上がリ、年が明けてから



台 正人さん

「ハシゴ酒新年会」を早来地区で開催しました。これも大盛況でした。ハシゴ酒イベントは町民の心をがっちりつかみ、結果的に1年間で6回も開催する大人気イベントになりました。

——お話をうかがっていると、安平町の元気が伝わってきますね。

井内 安平町の特徴だと思っんですが、民間というか、住民が積極的に動くんです。うちのセンター以外にも、震災後半年のうちにNPOが二つ立ち上がりました。一つは、子どもの遊び場をしっかりと確保しようという「はやきた子どもの遊び場づくりネットワーク」です。もう一つはスポーツ少年団「アビースポーツクラブ」で、震災でスポーツができる場所が減ったこともあり、バレーボールや野球、サッカーなど各競技団体が手を組んで立ち上げました。加えて、先ほど話が出ていたクラウドファンディングですね。資金から自分たちで集めることにチャレンジしようという機運が、安平町にはあるように思います。そして行政も、住民が立ち上がることに對して応援してくれる。そういう意味でも、行

政と住民の間にはいい関係が築けているように思います。

——まちづくりの専門家として、林さんは安平町の復興をどのようにご覧になっていますか？

林 すでに復興に向けた様々な取り組みが行われていて、前に進んでいると考えています。井内さんがおっしゃったように、新しいことにチャレンジしようという人もどんどん増えていると思いますし、安平町役場の皆さんも新しい取り組みを積極的に応援してくれています。

安平町には「子育て・教育を中心としたまちづくりを進めていく」という明確な方針があります。その象徴的な存在として注目されるのが、地震で壊れてしまった早来中学校に代わって建てられる早来小中一貫校です（令和4年度完成予定）。新しいスタイルの学校というハード面だけでなく、ソフト面でも学校教育と社会教育を連携させた教育が行われるなど、安平町を代表する、魅力ある施設となるように準備が進められています。

安平町の復興を「まちづくり」的な観点



中学3年生を対象にした「あびら未来塾」



及川町長(中央)も参加した「ハシゴ酒忘年会」

で捉えると、震災後の復旧に向けた動き出しが早く、そのエネルギーとスピードのま、復興ボランティアセンターや二つの新しいNPOも立ち上がったということで、まさにピンチをチャンスに変えたという印

象があります。さらに令和元(2019)年には「道の駅あびらD51ステーション」という経済面での大きなシンボルが立ち上がっています。震災を機に、新しいことにチャレンジしようというポジティブな動き

が色々な形で出ていて、前向きな空気・雰囲気が育まれていると感じています。

——ボランティアをきっかけに移住されたお二人は、今後、安平町にどう関わっていきたいですか？

台 僕は「ENTRANCE」というこのコミュニティスペースが、新しい取り組みを始めるきっかけの場所になるように、しっかり運営していきたくと思っています。町民の方からもっと「こういことをやりたいんだけど、どうかな」という熱い思いが生まれてくるような環境を整えて、アグレッシブな動きにつながったら嬉しいなと思っています。

溝口 私は今、観光協会で道の駅の運営にも携わらせていただいているので、年間80万人から100万人が来場するその場所を使って、安平町の魅力を町内はもちろん町外にも発信していきたいですね。



溝口 駿さん

失い、一から創った学びの場 大事なことは場所ではない

早来中学校
当時 教頭（現 苫小牧市立和光中学校教頭）
教務主任
生徒指導部長

小笠原伴行さん
石川 明子さん
高木 理さん

——発災直後の中学校はどのような状態でしたか？

小笠原 玄関のガラ
スが半分近く割れ、
職員室内の物はかな
り倒れていました。



小笠原 伴行さん

校舎の一番高い所に貯水タンクがあるので
すが、配管の破損から水が全部流れ出てい
て、校内は水浸しになっていました。

また、発災直後に安平町役場から物資が
届いていました。体育館を避難所として開
放する予定だったのだと思いますが、校内
では一切水が使えず、体育館もトイレや水
飲み場が使えない状況。細かい経緯はわか
りませんが、避難所は開設されませんでした。
た。

体育館のダメージが大きかったことが印

象に残っています。暖房用の配管が外れ
て、天井からもばらばらと色々な物が落ち
ていました。

——生徒への連絡はどのようにされたので
しょうか？

小笠原 町内の小中学校では、メール配信
システムを当時からすでに利用していて、
各家庭にメールで連絡ができるようになって
いました。平時はこのシステムを使って
臨時休校などの連絡をしています。通常
は、学校のパソコンから配信システムを使
用するのですが、停電のためパソコン自体
が使えませんでした。緊急時も配信できる
ように自身の携帯電話を設定していたの
で、発災直後は携帯電話からメールを配信
しました。

それ以外に、メールが届かない家庭や登
録がまだ完了していない家庭には、非常用
の電話回線を使って先生方に連絡してもら
い、避難所も回って避難している生徒を確
認しました。生徒全員の所在が確認できた
のは地震当日の夕方でした。以後は避難所
に設置された掲示板などを利用して、授業
再開の連絡などをしました。

——町民センターを仮校舎にして授業を再
開されましたね。

石川 地震から1週
間後の9月14日に、
2時間くらい授業を
行いました。集会と
学活です。



石川 明子さん

小笠原 当初は本校舎の教室を復旧させる準備をしていましたが、教育委員会の判断により断念しました。体育館以外にも、理科室の天井の梁のモルタルが落ちていたりといった被害がありました。このモルタルがかなり重かったので、万が一のことがあると危険だと判断されたのだと思います。ですから、生徒はその後一度も校舎に入ることなく、校舎は使えなくなりました。

仮校舎の建物は、1階が避難所になっていた町民センターで、早来中学校は2階と3階を使わせていただくことになりました。仮校舎でどれくらいの期間過ごすことになるのかわからなかったため、机や椅子は運ばず、町民センターの長机とパイプ椅子を使うことにしました。

高木 13日の引っ越しには、何十人というボランティアの人たちが来てくれたんです。町民センターには黒板がありませんから、移動式の黒板やホワイトボードをかき集めて何台も運びました。



高木 理さん

——避難所と同じ建物の中ということでは、気を遣われたのではないですか？

小笠原 一番気を遣ったのは、やはり音でした。生徒が活動する中で出る音もありますし、逆に聞こえてくる音もあります。例えば隣に調理室があつて炊き出しをされていますので、その音が授業中の子どもたちの集中力に影響しないだろうか、などという心配がありました。

もちろん避難されている方々は大変な状況にあるので、子どもたちには、休み時間に大声で話したりしないなど、避難所の皆さんに迷惑がかららないように気をつけていこうと、担任の先生から呼びかけてもらったりしました。



被害を受けて使用できなくなった早来中学校の旧校舎



ボランティアによる仮校舎への引っ越し

石川 町民センターは入口が1階と2階にあって、避難所の入口は1階、中学校は2階と分けて使っていましたから、交錯することはありませんでした。中には避難所から通う子もいて、その場合も内部階段ではなく、いったん外に出てから外階段を上がり、2階にある学校の入口から入っていました。また、3階の教室に入る前には上靴に履き替えるなど、気持ちの切り替えができるようにしていました。



仮校舎で練習する吹奏楽部

——授業で苦労されたことは何かありましたか？

小笠原 3階の4部屋を教室として使いましたが、3年生は2クラスだったので一番大きな部屋をアコーデイオンカーテンで2つに仕切り、中くらいの部屋2つを1年生と2年生、和室を特別支援のクラスに割り当てました。

3年生の場合、1つの部屋を仕切っただけなので、それぞれの授業の音が聞こえて、先生方はやりづらかったと思います。

また、授業ではホワイトボードや移動式の黒板を使いました。通常の教室にある大きな黒板と違って、子どもたちはノートが取りにくかっただろうと思います。先生方もプロジェクターで壁に映像を映すなど、色々な工夫をしていました。

石川 私が担当する数学は1クラスを二つに分けて2名の先生で教える少人数指導を行っていたんですが、仮校舎では場所がなく、それができませんでした。数学は生徒たちの理解に差が出る教科でもあるので、慣れない一斉授業で「子どもたちがうまく対応できるかな」というのが最初の心配でした。

それから、テストが長机だととてもやりにくかったですね。すぐ隣に人がいるので子どもたちも見えないように神経を使っていましたし、集中したいけれども見えてしまう範囲に隣の人があるし、消しゴムをかけると机がガタガタ揺れて集中できないということもありました。

高木 私は保健体育が担当ですが、最初のうちは近くの早来小学校も避難所になっていたので、同じ町内にある遠浅小学校にスクールバスで移動して、体育館を借りてい

ました。移動時間は15分くらいです。

本来、体育の授業は週3時間なんです。そんなに通うことはできないので、教室でできる保健の授業を増やしました。生徒たちが運動不足にならないか気になりましたが、体力の低下よりも、動きたいのに動けないというストレスのほうが大きかったように思います。

——電話やネット回線はどうでしたか？

小笠原 町民センターで職員室として使っていた部屋には、ネットワークの設備がありませんでした。元の校舎の職員室を借りるようにしていただき、先生方が二つの職員室を行ったり来たりしていました。ほぼ毎日です。ただ、元の校舎では電気は使えるようになって、水道が長期間使えない状況が続いたため、苦労しました。

また、はやきた子ども園からテレビ会議システム用のタブレット端末などの機材をお借りして、元の職員室と町民センターの職員室で顔を見ながら話ができるようになりました。私自身は電話対応や管理面から元の職員室にいたことが多かったのですが、このシステムはとても助かりました。

電話については、町民センターの電話を頻繁にお借りするわけにはいかないのですが、ソフトバンクから被災地支援として携帯電話を貸し出していただいて、仮設校舎ができるまでの4カ月間、保護者との連絡用などに使わせていただきました。

——生徒たちの心のケアについてはどのように対応されたのでしょうか？

小笠原 元々、月に1回程度、スクールカウンセラーの先生を学校に派遣していただ



平成31(2019)年1月から使用しているプレハブの仮設校舎

いていました。地震後は、北海道教育委員会からの緊急派遣で応援の先生にも入っていただいて、生徒へのカウンセリングの回数を増やしました。地震直後には、スクールカウンセラーの日になると、何人かの生徒が相談に来ていました。

高木 震災後の比較的早い時期にアンケートを行い、生徒の状況を見ていました。夜眠れないなど、余震も続いていたので不安感を訴える生徒が多かったですね。

「少し心配」と先生方から名前が挙がった生徒のアンケート結果はスクールカウンセラーの先生にも見ていただいて、必要と判断された場合は生徒にカウンセリングを受けてもらいました。アンケートは震災から1週間後、2週間後、1カ月後と少しずつ間隔を置いて行い、ついこの間の2年後にも実施するなど、ずっと継続しています。

——受験を控えていた3年生への影響はありましたか？

石川 最初は、勉強がどのくらい遅れるかと心配でしたが、逆に学校行事ができなくなってしまう分、授業を入れていくしかないということもあって、思ったほどの遅

れは出ませんでした。ただ学習環境は決まっていたとは言えなかったもので、やはり心配していましたね。

それでも学校祭は「何と少しでもやろう」と中止にはしませんでした。そのこともかなり、子どもたちが頑張る力になったのではないかと思います。

小笠原 子どもたちの意欲なども考えると、行事を全部やめて勉強ばかりというのはストレスがたまります。何を残して何を削るか、どこでストレスを発散させるか、どのように経験を積ませるか、ということについては、先生方はかなり考えて知恵を出していました。

もちろん子どもたちの頑張りもあって、地震災害時の3年生は全員志望校に入ることができました。

——部活動は続けることができたのでしょうか？

小笠原 できる限りではありませんが、続けていました。一番問題になったのは活動場所、野球部の場合は小学校のグラウンドだとサイズが小さいし、少年団の活動もあります。かといって町のグラウンドも被災

して使えないので、しっかりと活動できる場所がなかなかありませんでした。軟式テニスは2年連続で全国大会に出場していたのですが、テニスコートはこの辺にはないので近隣の千歳市まで行ったり、苫小牧市の小学校の体育館を借りたりしていました。吹奏楽は室内の活動ですが音が出るので、避難所と一緒に仮校舎で行うにあたり、音の影響をできるだけ抑える工夫が必要でした。どれだけ効果があったかはわかりませんが、防火扉を閉めたり、夏でも窓を閉め切って練習をしたりしました。災害復興支援で、ポータブルのエアコンを設置していただくことができ、感謝しています。

——プレハブの仮設校舎には年が明けてから引越されたと聞きました。

小笠原 12月末に完成して、1月4日に引越をしました。何とか3学期に間に合わせたいということもあって、教育委員会をはじめ、たくさんの方々のご協力をいただき、予定通りにスタートを切ることができました。

引越しにあたっては、何を持っていくかで結構悩みました。言ってみれば、一つ

の学校を創るのと同じです。仮設校舎が完成して「教室」というスペースは出来ても、それだけではまだ教室環境が整ったとは言えません。町民センターの仮校舎や

元の校舎から何を運ぶと環境が整うか。冬休みに入っただけの3日間です。先生方に必要なものを洗い出してもらい、図面の中に全部書き込んでいただきました。仮設校舎は町民センターの仮校舎より大きいとはいえ、それでもすべての備品を運び込むことはできませんでした。引越したあとも、必要な備品を元の校舎に取りに行き、使わなくなった戻すということを繰り返していました。



仮設校舎の教室の様子



仮設校舎の廊下。他校の生徒など様々な方々からの応援メッセージが貼られている

——色々な支援の中で、特に印象に残っていることは何でしょうか？

小笠原 一つは、ボランティアの皆さんで立ち上げ、運営していた「あびら未来塾」です。子どもたちの学習環境が整わない中、3年生が卒業するまでの間、子どもたちが自主学习できる場所と時間を無償で提供していただきました。塾の終了後には、使用していたタブレット端末を学校で借用させていただき、授業でも活用することが



今も仮設校舎の玄関に掲げられている「サンキューベリーマップ」

できました。

また、全国から本当にたくさんのご支援をいただきました。生徒会や部活動を中心に呼びかけを行ってくださり、たくさんの方々から義援金や寄付、メッセージなどをいただきました。今も仮設校舎の玄関には、ご支援いただいた方々を地図にまとめた「サンキューベリーマップ」を掲げています。

高木 マップ以外にも、仮設校舎には本当に色々なメッセージなどが貼られています。個人の方で、子どもたちのために「必要じゃないですか？」と文房具を送ってくださってから、ずっと支援を継続されている方もいます。

——震災から約2年が経過しました。振り返ってみていかがですか？

小笠原 学校として避難訓練は定期的に行っていたものの、今回は子どもたちが学校で活動している時に起こった災害ではありませんでした。場所や時間、季節によっても対応する状況が変わります。その時々で子どもたちが自分の命を守るための行動ができるように、様々な状況を想定して指導する必要があるのではないかと感じました。高木 たくさんのご支援をいただいて生徒も我々もとても感謝していますが、現在もまだ被災は終わっていないというのが現実です。仮設校舎から卒業しなければならぬなど、その面で子どもたちが負い目を感じないような教育を何とかやっていきたい。「まだ終わっていないぞ」という気持ちを持って、日々努力して過ごしていきたい

と思います。

石川 特に今の3年生は1年生の途中で町民センターの仮校舎に引っ越し、さらに仮設校舎で過ごして、令和4(2022)年度に完成する新校舎にも移れませんが、その生徒たちが、前の生徒会長が言っていた「場所じゃなくて、自分たちがいることがすごく大事なんだ」という言葉のように前向きに活動していくことを、これからも願っています。

小笠原 思いもしなかった災害が起こり、その中で、子どもたちの学習環境や安全に過ごせる状況をどうやったら整えられるか。先生方もそのことを第一に考え、知恵を出し合いました。それらを形にするうえで、子どもたち、家庭、地域やボランティアの方々など、多くの皆様のご協力とご支援がありました。令和4(2022)年度には小中一体型の新しい学校が完成します。これからも安平町の子どもたちが元気に学習に取り組むことができることを願っています。

防災意識の醸成と準備

対話を大事に、一人ひとり向き合うこと

追分第1町内会会長 工藤隆男さん

——町内会の防災活動について伺います。

追分第1町内会は安平町で最初に自主防災組織を立ち上げた町内会で、年に数



工藤 隆男さん

回、防災に関する会議を開いています。昭和56（1981）年の台風では安平川が氾濫し、鉄道官舎が流されました。その経験が今の防災意識につながっています。町内会内には高齢者施設があり、まずお年寄りの避難を考えます。施設長を町内会役員に入れて体制を強化、リヤカーでお年寄りを避難所へ運ぶ訓練などを行ってきました。

——発災直後について教えてください。

地震が起きてすぐに副会長と事務長など5名で全戸を回り、皆さんに「避難所の公

民館に集まってください」と呼びかけると、6時には全員が集まり、すぐに炊き出しです。おにぎりの朝食を出しました。ほかの町内会の方もいましたが、みんなで助け合おうという空気でしたね。その後、避難所運営の中心を担うことになり、2週間ほど家に帰らずに対応しました。

——避難所運営はいかがでしたか？

停電・断水もありましたが、すぐに回復しましたし、避難所の公民館は第1町内会内にある施設なので、何がどこにあり何ができるかが全部わかっていたので、条件は良かったです。避難生活が続くと、食事への不満、ほかの避難者への不満と、様々な声が上がります。そんな時は、今は我慢しようと話しました。避難所運営で関わった

方から、会話が生まれる声かけが大切だと教わり、「体調はどう？」と声をかけ、不安を和らげるために多くの人と少しでも話をしようと努めました。会話をして必要を感じた時には、保健師につなげたりと。色々な方がいて、色々な考えがあります。一人ひとりと向き合うことを大事にしました。

——その後はいかがでしょうか？

地震後、「震災ご苦労さん会」を始めました。70人くらい集まるんですが、お酒やお茶を飲みながら体験談を話してもらっています。防災を核としたコミュニケーションを続け、被災の記憶を風化させず、継続して訓練をやっていくことが大切です。みんなが知って、みんなが行動できるようにしなければならぬと考えています。

人の思いやり、温かさを実感 より多くの方を助ける体制づくりを

追分第2町内会会長

小野寺 捷さん

—— 発災直後の状況について伺います。

経験したことのない大きな揺れで、つかまつた柱が斜めに傾いて、家のきしむ



小野寺 捷さん

音、食器の割れる音に言葉では表現できない恐怖を感じました。自主防災組織の委員長として見回りをしようとしたのですが、鍵が壊れ、外に出られない状態に。妻と斜めにつぶれたベランダの戸をこじ開け、やっと出られたのが1時間後くらいです。

すぐに近所を見回り、消防に連絡して閉じ込められた方を救出してもらいました。後日、自宅は全壊の判定を受けたのですが、築年数40年ほどの家は基礎から壊れてしまい、避難所生活を余儀なくされました。

—— 避難所生活はいかがでしたか？

避難所にいたのは地震の3日後から46日

間です。避難所を運営された方々はあらゆることで寄り添ってくれましたし、隣町の知人友人が心配して励ましに来てくれたりと、人の思いやり、温かさを感じる事ができましたね。本当にありがたかった。感謝しかありません。

同じ町民でありながら、これまで話したことがない人と話す機会が増えました。余儀なく始まった避難所生活でしたが、ずいぶんと視野が広がったように思います。避難所を出たあとも「元氣かい」と声をかけ合っています。それだけでありがたいことだなと思いますし、人間の奥深さに改めて気づかされました。

令和元（2019）年の5月に北海道主催で胆振東部地震に関するシンポジウムが開催された際には、自分の経験・考えを伝えることで今後の災害対応に少しでも役に立てればと思ひ、今言ったようなことを発

表しました。

—— ご自身の生活再建はいかがですか？

避難所からみなし仮設住宅に入りました。その後、被災者向けの融資を使って自宅を新築することができました。震災から約2年経過し、ようやく一息ついたと感じています。

—— 町内会の防災意識は変わりましたか？

防災倉庫を建てて、充電器やヘルメット、救急用品などを毎年少しずつ備蓄しています。町内会の人たちにも備えをしてもらいたいとすすめています。そのためは「まずは我々から」と役員間で話しています。自主防災組織を充実させ、万が一の時、より多くの方々を助けられる体制づくりを進めています。

被災地を支えた警察活動 自助共助をこれからも

北海道札幌方面苫小牧警察署地域課
安平駐在所巡査部長 本山 登さん

——発災直後、9月6日の活動について教えてください。

すぐに制服ではなく災害時に着用する出動服に着替え、警察無線を持って、迷



本山 登さん

わず安平公民館へ向かいました。安平地区の自治会は防災意識が高く、災害時には公民館に集まることを周知するなど、初動要領を決めていました。ちょうど安平第一自治会の自治会長も来て、私に「頼む」と一言。発災後10分から20分くらいのもので混乱はしていましたが、その一言で独居高齢者の対応を任せられたとわかりました。

安平町の駐在所は全部で4カ所あり、私がある安平駐在所のほかに早来・追分・遠浅駐在所があります。私は安平・早来瑞

穂・早来緑丘・東早来・早来守田の治安維持を任せられております。当時、駐在所管内には約70名の独居高齢者がいて、余震の心配もありましたので、急いで安否確認へ向かいました。中には家から離れるのを嫌がる方もいましたが、気にかけて駆けつけた近所の方が「ここは私たちに任せて、ほかの所に行ってあげて」などと協力をしてくださいました。5人の方を公民館へ運んだ頃に朝日が昇り始めました。その間も住民同士で連絡を取り合っており、自治会長から「安平・瑞穂・緑丘は全員無事だ」と報告を受け、安堵しました。

その後、苫小牧警察署のパトカーや、ふだんは事件捜査に従事している機動捜査係の応援も入り、守田と東早来の安否確認も終え、午前8時には全域の安否確認が完了

しました。

発災直後は、一人で大丈夫かなと不安でプレッシャーもありましたが、住民の方々の協力や住民同士の助け合いもあり、自分一人じゃないんだと教わりました。感謝しかありません。

——避難所や周辺の治安維持も課題となつたと思いますが、いかがでしたか？

その後も道内、道外を問わず続々と被災地に応援が入り、道警約3、800名、道外約3、600名の延べ約7、400名の警察職員が活動しました。

道外からの応援部隊には、パトロール・交通整理のほか、避難所での相談事の対応など、9月29日まで多岐にわたり警察活動の支援をしていただきました。不審者情報

もあり、避難して留守になった自宅を不安に思う声も聞こえてきましたので、そうした住宅地などもパトロールしていただき、不安解消に努めていただきました。応援の警察官の方々にしっかりパトロールしていただいたおかげもあり、この地区では空き巣などの被害はありませんでした。

—— 今回の災害を通して、災害時には何が大切だと思われましたか？

防災訓練が活かされましたね。皆さん、災害時には公民館へ行くものだとわかっていますから、「公民館へ行く」と言ったらすぐ理解してくれましたし、避難に必要な物がどこにあるのかもご存知でした。震災前の訓練では、まさか実際に発生するなんて思っていませんでしたが、あとから思えば、訓練は本当に大事なんだと痛感しましたね。訓練があったからこそ、避難や避難所運営もスムーズに運んだのではないのでしょうか。訓練は以前は年1回でしたが、地震後の昨年は2回実施し、冬に災害が起ることを想定していました。

訓練だけではなく、平時からよく住民が集まります。結束が固い、素晴らしい地域

です。

避難所の運営や炊き出しでも自宅に大きな被害があった方までお手伝いに来てくれて、住民の皆さんの助け合いの姿勢には本当に頭が下がります。これからも皆さんと地域防災の取り組みに励みたいと思います。

—— 災害に対して心がけていることはありますか？

何が起こってもいいように備えています。想定外のことが起こってしまうのが災害です。どうしても公助は遅れてしまうので、この地域みたいに自助、共助ができていく地域を増やしていくことが重要だと思います。ここだと駐在所員が1名しかおらず、人員も限られていますので、警察としても訓練や啓発に積極的に取り組み、地域防災力を上げていくことも大切だと感じています。



安平市街

危険排除の大切さ

続けた消防活動と救助活動

胆振東部消防組合 消防署安平支署
支署長 寺島 博一さん
追分出張所長 小笠原規人さん
主幹 米倉 俊也さん

——震災直後の状況を教えてください。

寺島 すぐに消防に駆けつけて、そのあと、安平町役場へ向かいました。当然、



寺島 博一さん

災害対策本部が立ち上がるだろうと判断したからです。

小笠原 地震が発生した時は、安平支署に6名、追分出張所に4名が勤務してい



小笠原 規人さん

ました。すぐに緊急車両が出動できるようシャッターを開けました。全署員（安平支署21名、追分出張所13名、当時1名札幌に出張）が出動し、町内巡回に出動しました。米倉 地震直後に安平町内を巡回し、複数の隆起や陥没した危険な道路箇所を発見

し、一般車両はもちろんのこと、消防車両の通行に支障があるのを確認しました。



米倉 俊也さん

陥没した道路で発生した事故車両の対応が1件ありましたが、建物や車両等の火災発生はありませんでした。

しばらくして「厚真町に向かう道道が寸断されている」との連絡があり、確認のために現地へ向かいました。ごみ処理場入口の手前付近で、数台の一般車両と自衛隊車両が停車しており、その先に道道を完全に封鎖する、地滑りによる土砂崩れを確認しました。地滑りに巻き込まれた車両がないか確認したところ、該当車両はなく、安心したことを覚えています。

——どのような活動をされていましたか？

小笠原 地震発生直後の3時38分に「階段から滑り落ちて腰を痛めた」と最初の通報が入りました。明るくなるにつれて「ホームタンクがひっくり返った」「ドアが開かない」などの通報が寄せられ、全部に対応しました。震災当日は7件（早来地区7件、追分地区0件）の通報がありました。が、幸い重傷者がいなかったことと、早来地区の渡邊医院が患者を受け入れてくれたことで、スムーズに搬送できました。

寺島 対策本部にも「家が倒壊しそう」など、住民から様々な連絡が入ってきますので、そうした情報を支署と出張所に伝え、必要に応じて出動させました。「道路が寸断されて避難所に行けない」という報告を受け、消防職員が自衛隊車両に同乗し、道

案内をして救出に向かうこともありましたが、

また、防火水槽に亀裂が生じている可能性があるので、町内すべてを確認するように指示。幸い火災は起こりませんでした。が、可能性はありますので、その場合にすぐ対応できるようにしていました。

——厚真町の現場に職員を派遣されていますね。

寺島 厚真町の被害が甚大なため、組合本部から救出作業に加わるよう指示がありました。9月6日朝から10日朝まで、交代で2〜3名、多い時で5名を派遣しています。

小笠原 道路が寸断されているので遠回りする必要があります。現場に行くのに1時間近くかかりました。土石流で大木がなぎ倒されているなど、これまで見たことがない光景が月明かりに照らされていました。強烈な記憶として残っています。自衛隊が重機を操作し、消防職員がスコップで掘り起こすのですが、流れ出した土は硬く、まるでコンクリートのようでした。

米倉 人命が助かる可能性のある72時間は、途切れることなく徹底して救出活動を行うため、3時間の交代制で救出活動を続

けました。

小笠原 現場は厚真の奥まった地域だったので、地震による道路迂回など、行き帰りの時間を含めると実質交代に5時間はかかりました。支署に戻ると、今度は安平町の安全確保のための活動や勤務に当たり、すぐ出動できる態勢を確保していました。

——震災を経験し、どのようなことが教訓として活かされるべきでしょうか？

寺島 震災から1年後に、震災時における消防組合の連絡体制などが話し合わせ、反省しなければならぬ部分は反省しました。冬季に地震が発生した場合は火災の発生確率が高くなるので、平時の火災予防の呼びかけなどを細かく行っています。地震を防ぐことはできませんが、火災を最小限に防ぐことは可能だと思います。住宅用火災警報器の普及も進んでいますし、住民の防災への意識は高まってきていると感じています。

——今回の地震で消防の一番の役割は何だったと思われますか？

寺島 今回の地震で私たちが一番に行った

ことは、危険排除です。地震によって屋根のトタンが剥がれた家屋は、雨が降ると漏電火災を起こす危険性があり、さらに剥がれたトタンが飛んで歩行者に当たると、怪我人が出る危険性もある。そういった危険性を未然に防ぐ活動が危険排除です。

地震により複数の灯油ホームタンクが倒れて油漏れが発生したので、油の抜き取り作業と再転倒防止の処置を施しました。住宅の外煙突が損壊で倒れそうな箇所では固定処置を施しました。それらの危険排除に対応するのも消防の仕事であります。

その後余震が起こっても安全を保つことができる状態にしておくことが、消防の仕事で一番大切な役割だと思います。



消防署安平支署にて

